

▷ 足踏水車(あしふみすいしゃ)

水田が水を引く水路より高い位置にあるときに、水田に水を揚げるために使われた農具で、いわばポンプの役目を果たします。かつては県下でも各地の水田で見られ、人が水車に上がり、足で踏み、水車を回転させて水を揚げていましたが、今ではすっかり姿を消してしまいました。

田植えが終わり、秋の彼岸の頃までは、4、5日ごとに水を田に入れていますが、多くはこの水車を利用し、所によっては、石の重みでつるべをはね上げ、水を汲むようにした「ハネツルベ」というものも使われていました。

また、香川県の名物さぬきうどんをつくるための製粉や精米のための水車もかつては多く見られました。洪水のときには、水車小屋が預かった原料とともに流されてしまったり濁水で水車が回せなくなったりと、水量の安定しない香川県においては、水車にまつわる苦労も絶えませんでした。



水かえ唄(高松市 福岡町)

かえて何すりやかいおけの水を 一生福岡におりやすまい

千里奥山の水車でも 誰をまつのかくるくと

(水かえ唄は、全国的にも珍しい仕事唄です。)

